博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　阿部　新　　印

学位申請者　佐藤　茉奈花（さとう　まなか）

論　文　名　アニメキャラクターの性格類型ごとの言葉づかいの特徴

【審査の結果】

審査委員会は阿部新を主査とし、本学の伊集院郁子教授（主任指導教員）、伊達宏子准教授、嶋原耕一准教授、田中牧郎教授（外部委員、明治大学）の 5 名で構成された。最終試験は 2025 年 11 月 17 日（月）に行われ、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するのに相応しいものであるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究は、キャラクターの性格が言葉づかいによってどのようにあらわされているのかを解明し、得られた知見をもとに、演出したい性格の人物像に応じて言葉づかいを選択する際に有用な示唆を提供することを目的としたものである。従来の日本語学や社会言語学では、「誰がどのように話すのか」という問いに対し、社会的属性に焦点を当てる研究が中心であったが、個人の性格も言葉づかいに深く関わっていると考えられる。しかし、現実の会話では状況や関係性が複雑に絡み合うため、性格そのものがどのように言葉づかいにあらわれるのかを直接検証するのは難しい。これに対しフィクション作品、特にアニメに登場するキャラクターは、視聴者にわかりやすく人物像を提示するために、性格に応じた言葉づかいが意図的に設計されている。さらに音声面でも、性格に合わせて調整されるため、言語的・音声的特徴を統制的に分析できる利点がある。 以上を踏まえ、本研究では、アニメキャラクターを対象に東大式エゴグラムを用いて性格分類をおこない、語彙レベル、文・談話レベル、音声レベルという 3 つの観点から分析することで、性格と言葉づかいとの結びつきを多角的に検討した。

本論文は 8 章からなる。各章の要点は以下のとおりである。

第 1 章では、言葉づかいによる自己演出における「性格」の重要性を位置づけ、本研究の目的を提示した。

第 2 章では、性格に関する先行研究と、キャラクターの言葉づかいに焦点を当てた研究について整理し、本研究の位置づけを明らかにし、語彙レベル、文・談話レベル、音声レ

ベルの 3 つの視点から多角的に分析をおこなうことを示した。

第 3 章では、キャラクターの性格を分析する枠組みとして東大式エゴグラムを取り上げ、その理論的背景と診断手順を整理した。この枠組みに基づいて分析対象としたキャラクターの性格分類をおこない、言葉づかいの特徴を分析するための基盤を整えた。

第 4 章と第 5 章の分析では、『ラブライブ！School idol project』『BanG Dream！』『五等分の花嫁』の 3 つのテレビアニメシリーズを対象に、キャラクターのセリフをテキストデータ化し、分析をおこなった。これらの作品のキャラクターについて、東大式エゴグラムで示される 5 つの自我状態（CP：Critical Parent、NP：Nurturing Parent、A：Adult、FC：Free Child、AC：Adapted Child）に基づいて性格類型を判定した結果、各自我状態が最も顕著にあらわれる「優位型」に分類されるキャラクターが多くみられた。そのため、各優位型（CP 優位型、NP 優位型、A 優位型、FC 優位型、AC 優位型）に分類された 29 人のキャラクターを分析対象とすることとした。

第 4 章では、語彙レベルの分析をおこなった。テキストデータを形態素解析し、対数尤度比（Log Likelihood Ratio：LLR）に基づいて性格類型ごとの特徴語を抽出したうえで、性格と語彙選択との関連を検討した。その結果、各性格類型において以下の傾向が確認された。【CP 優位型】は「リーダー」「当たり前」など秩序や価値観、物事の本質に関する語を用いて自らの価値基準を明確に示しながら、丁寧体や女性文末詞で断定し、打消しの助動詞「ず」や代名詞「あんた」などによって断定的・批判的に表現する点に特徴がある。【NP 優位型】は「御免」「良い」などで他者への配慮や肯定的評価に言及し、接続詞「で」や接続助詞「けれど」「から」で説明を補い、終助詞「ね」で同意を求めたり、「じゃん」で断定を和らげたりして、形式ばらない親しみやすい表現を特徴とする。【A 優位型】は「事」「訳」などで事実や理由を提示しつつ、助詞「を」「に」「は」で文構造を明確にし、接続助詞「けれど」「から」で前提や理由づけを補うなど、論理的・客観的に提示する表現を特徴とする。【FC 優位型】は、「皆」「学校」「あはは」「凄い」など他者との交流や活動、感情、評価に言及し、助動詞「たい」「ちゃう」、終助詞「もの」で自身の感情や願望を率直に表現する点に特徴がある。【AC 優位型】は「大変」「えーと」など不安や困難に関する事柄を、助動詞「ちゃう」で否定的感情や迷いをにじませ、ためらいをにじませながら表現する点に特徴がある。このように、語彙レベルでは、性格類型ごとの関心や価値観、表現方法の特徴が明らかになった。

第 5 章では、文・談話レベルの分析として、テキストデータに対して発話機能の判定を行い、性格類型ごとの発話機能の使用傾向と、先行発話に対する応答パターンの傾向を分析した。その結果、各性格類型に特徴的な傾向が確認された。たとえば、【CP 優位型】では〈否定〉〈見解〉〈単独行為要求〉の使用が多く、相手に対して是正を促す、行動を求めるといった主導的な姿勢があらわれていた。応答パターンに関しても〈否定〉を多用して自己の主張を通そうとするなど、相互理解よりも自己の価値観に基づいた関与が優先され

ていた。一方、【NP 優位型】は〈質問〉や〈肯定〉を通じて相手の意向や状況を引き出し、受容的・協調的に応じる発話が目立った。応答パターンでは、関係性を重視した〈肯定〉での応答が特徴的であった。【A 優位型】は〈陳述〉〈見解〉〈質問〉の使用が多く、状況を整理しながら論理的に対話を展開する傾向がみられ、感情的な発話を避けるという特徴がみられた。応答パターンでも、〈反応〉で即時的な応答を避けたり、〈見解〉で論理的に応じようとする傾向がみられた。【FC 優位型】は〈感情〉〈肯定〉〈共同行為要求〉などを多く用い、ポジティブな感情や評価を率直に表現しながら、他者との関係構築や場の活性化を目的とした発話を多用する傾向があった。応答パターンでも〈肯定〉で相手を肯定し、対話の中で関係を深めようとする姿勢が顕著であった。【AC 優位型】は〈陳述〉〈反応〉〈肯定〉の使用が多く、自らの意見や評価を前面に出すのではなく、相手の発言を受け止めたり、事実や状況を共有したりする発話が多く確認された。応答パターンでは、〈反応〉で明快な応答を避け、言い淀みを含んだ控えめな応答を多用するなど、相手との関わり方にも慎重さがうかがえた。このように、文・談話レベルの分析から、性格類型ごとの対人姿勢の傾向が明らかとなった。

第 6 章では、音声レベルの分析をおこなった。プロの女性声優 1 名に、同一の発話内容について、第 4 章、第 5 章で対象とした 5 つの優位型の性格特性に沿って性格設定をしたキャラクターを演じ分けてもらって収録した演技音声データを対象に、音響分析ソフト Praat を用いて基本周波数（F0）や文末イントネーション、時間長について、性格類型による音声的傾向の違いを検討した。その結果、【CP 優位型】は、抑揚が大きく、多様な文末イントネーション型を用いてテンポよく話す傾向がみられた。【NP 優位型】は、中程度の音域で過度な抑揚を避け、疑問型上昇調を多用しながら、ゆっくりと丁寧に話すという特徴がみられた。【A 優位型】は、低めの声で抑揚を抑え、平坦調や無音調によって感情をあまり表出せず、発話自体は速いがポーズを長くとるといった話し方をしていた。【FC 優位型】は、高い音域で抑揚も大きく、文末を勢いよく上げる音調を多く用い、ポーズを挟まずに一気に話すことで、明るく活発な人物像を演出していた。【AC 優位型】では発話時間やポーズ時間も長くなるなど、遠慮がちな性格特性をあらわす調整が確認された。このように、音声レベルの分析では、声の高さや抑揚、文末イントネーションの選択、発話のテンポやポーズの取り方といった音声的特徴が、性格設定に応じて調整されていることが明らかとなった。

第 7 章では、第 4～6 章の分析結果をもとに、各性格類型における語彙、発話機能、音声の特徴を統合的に考察し、それらが性格特性の演出にどのように寄与するかを明らかにした。さらに、特徴的な語彙や発話機能に音声的特徴を組み合わせることで、当該類型らしい発話を構築できることを具体的に示した。

第 8 章では、本研究の結論をまとめたうえで、本研究の意義や限界点と今後の課題、さらには展望について述べた。

以上、本論文では、キャラクターの性格と言葉づかいの関係を多角的に分析し、キャラクター言語研究に新たな方法論を提示することができた。また、日本語学の知見を深めるだけでなく、コミュニケーション教育や日本語教育、対話型 AI の開発などの応用にも貢献し得る知見を得ることができた。

【講評】

本論文は、論旨が一貫しており、構成や表現も整っていて完成度が高いこと、新規性のあるテーマを扱い、優れた方法論に基づいて明確な結論を導き出していることから、高く評価された。特筆すべき点としては、以下のような指摘があった。

- 「性格と言葉づかいの関係」という興味深いものの学術的に論じるのが難しいテーマに果敢に挑み、アニメ作品から言語コーパスを作成して多角的な分析を施し、適切な統計手法を用いて数値的に特徴を示した上で、さらに用例の質的分析も加えて丁寧に記述を重ね、大変読みごたえのある論文に仕上がっている。
- 語彙レベルの分析では特徴がみられない場合でも、文・談話レベルや音声レベルでは顕著な特徴がみられる性格類型もあり、多角的に言語データを捉えることで、各性格類型の特徴を浮き彫りにすることに成功している。
- 博士論文として十分な成果を上げつつも、さらにさまざまな学問領域での発展の可能性が秘められており、今後の展開が楽しみな研究である。

一方で、問題点として以下のような指摘があったが、いずれも、今後の研究の発展の可能性の指摘や研究成果を現実のコミュニケーションに応用するための提言と解釈されるものであった。

- 性格類型ごとに特徴を捉えた点は評価できるが、同じ類型内での異なる言語使用の傾向や個人差についても描き出してほしい。
- 音声の分析で、声優が演じ分けた音声を扱った点は現段階での現実的な分析手法として評価できるが、技術的な問題が解決できればアニメ作品そのものの音声も分析できるとよい。また、音声関連の用語は、統一して示した方が読みやすい。
- 考察は興味深いものだが、キャラクター言語の先行研究に対する貢献についても詳述してほしい。

審査委員からの質疑応答で、佐藤氏は委員からのコメントや質問に対して的確かつ誠実に応答し、本研究の改善すべき点について十分に自覚していることを認識できた。

【総合評価】

学位請求論文の内容、最終試験での応答から、審査委員は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するのに相応しいものであるとの結論に達した。